



れきけん ニュースレター

Vol.17



儀式殿 外観（乃木神社所蔵） ※写真提供：石井翔大氏

- 特集：北海道蘆別神社に息づく大江宏の初心
- ブラジルを訪ねて～サンパウロ・リオデジャネイロ・ブラジリアそしてオスカー・ニーマイヤー～
- 炭鉄港が日本遺産に！！
- 建築ヘリテージサロン～多様な知恵と経験を備えて
- おすすめ・れきし系BOOK

●特集：北海道蘆別神社に息づく大江宏の初心

北海道芦別市の蘆別神社には、乃木神社（東京都港区赤坂）にかつて存在した儀式殿の部材が、一部保存・再利用されている。乃木神社といえば、社寺建築の大家、大江新太郎（1879-1935）の設計により、1923年に創建されたことで有名である。寄付金不足もあって、その後境内は時間をかけて整えられてゆき、ようやく完成を見たのは1934年、新太郎がこの世を去る前年であった。1945年、東京大空襲の火の手は赤坂にもとどき、乃木神社の境内は手水舎のみを残し、焼失することとなる。

新太郎亡き後、戦後の乃木神社再建を一任されたのは、彼の息子、若き大江宏（1913-1989）であった。まだ資材も乏しい1948年、宏設計によってささやかな仮本殿が建てられた。続く1951年、同じく宏の設計により、儀式殿が竣工した。現在蘆別神社に残されている部材は、この儀式殿のものである。

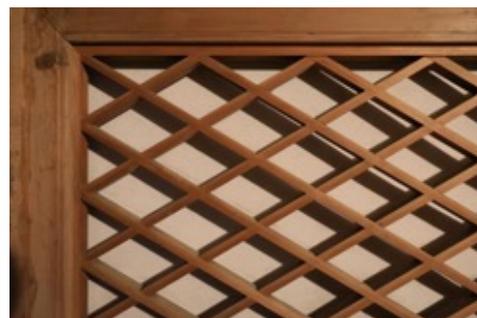
実はこの儀式殿、これまで大江の著作にある作品年表には載っておらず、管見の限り、大江自身も一切言及したことの無い作品である。現在の乃木神社境内に立つ儀式殿は1983年竣工、大江宏の息子である大江新（1943-）設計による二代目である。新によれば、初代儀式殿が解体されたのは二代目の建設時だったが、初代が宏設計であることは知らされていなかったという。当の宏はこの時、ひたすら国立能楽堂（1983）の設計に没頭していたらしい。

初代儀式殿が大江宏の手によると最近分かったのは、儀式殿竣工を伝える新聞記事に、その記述があったためである。

1951年9月30日付の読売新聞朝刊にある記事「乃木神社儀式殿落成」によれば、「設計は建築界の新人大江宏氏（焼失した乃木神社の設計者工博大江伸（原文ママ）太郎氏の長男）で奈良朝様式に近代感覚をもり込み、新しい型を生み出している」とある。目を引くのは「奈良朝～」以降の専門的記述である。このような記述が、新聞記者独自の解釈とも思えず、あるいは大江宏自身が、設計コンセプトを記者に語った可能性もあるだろう。終生にわたり伝統と近代の統合を模索した大江が初心を込めた作品として、儀式殿は注目に値する。

筆者は2018年3月、蘆別神社宮司の地原勇次氏のご厚意に預かり、実地調査をおこなった。現存する儀式殿の部材は、乃木家の家紋が象られた扉と釘隠し、柱の一部、格子戸、欄間、破風の格子など、往時の姿を想い描くに十分な量であることが分かった。いずれも保存状態はよく、特に欄間は、簡素ながらも細部まで丁寧に作り込まれており美しい。

その後、筆者は乃木神社にも協力を仰ぎ、儀式殿の貴重な写真を見せて頂くことができた。伸びやかでシャープな屋根、細身のプロポーションの柱など、のちの大江作品と共通する特徴が見受けられ、すでに高い完成度を示している。当時の写真から、儀式殿の主要な意匠は蘆別神社にある部材でほぼ確認できることが分かったため、今後、部材の実測データをもとに寸法体系を割り出し、3Dによる復元作業を進めたいと考えている。（法政大学デザイン工学部建築学科・教務助手 石井翔大）



儀式殿 欄間（撮影：石井翔大）



儀式殿 釘隠し（撮影：石井翔大）



写真上：儀式殿 外観
写真下：儀式殿 内観
いずれも乃木神社所蔵
写真提供は石井翔大氏

●ブラジルを訪ねて～サンパウロ・リオデジャネイロ・ブラジリアそしてオスカー・ニーマイヤー～

本年2月22日～3月6日にかけて初めてブラジルに行ってきました。40年来の友人S君夫妻(ご主人は北大留学時代から知己、奥様は家内の短大時代の同級生)を訪ねての旅である。

羽田国際空港からフランクフルト経由でサンパウロまで、約30時間の旅。フランクフルトからは、南アフリカ西海岸に沿って南下すると、サンパウロである。地球儀で確認すると、特に遠回りでないことも理解できる。サンパウロではS君のアテンドで、自宅に招かれたり、市街地を危険も



ニテロイ美術館 ※写真提供：角幸博

なく見学することができた。サンパウロを基点に、家内が見学希望のイグアスの滝をブラジル側とアルゼンチン側から堪能し、リオではコパカバーナ海岸に建つホテルに泊まり、ポン・ジ・アスナル、コルコヴァードの丘、セラロンの階段などの観光地から、ニテロイ現代美術館(Oscar Niemeyer)、ニテロイ市民劇場(Oscar Niemeyer)、カテドラル・メトロポリターナ(Edgar Fonceca)、王立ポルトガル図書館(幻想図書館)などの建築探訪を楽しんだ。学生時代から一度は訪れたかったブラジリアにはS夫妻も同行。カテドラル・メトロポリターナ(Oscar Niemeyer)、三権広場、国立劇場(Oscar Niemeyer)、ドン・ボスコ聖堂(Niemeyerの弟子Carlos Alberto Torres)、デジタルテレビ塔(Oscar Niemeyer)などを見学した。サンパウロでは、Oscar Niemeyerのイビラブ公園、ラテンアメリカ記念公園のほか、州立ピナコテッカ美術館、ルス駅のリノベーション、中央市場などの散策、地下鉄利用なども体験した。結局オスカー・ニーマイヤー中心の旅となった今回の旅の報告会を、れきけん会員様対象に、10月10日(木)に披露させていただきます。(代表理事・角幸博)

★特別講演会：ブラジルを訪ねて 開催のご案内★

～サンパウロ・リオデジャネイロ・ブラジリアそしてオスカー・ニーマイヤー～

当法人の角代表理事による特別講演会を下記の通り開催いたします。ブラジルの巨匠、オスカー・ニーマイヤー(1907.12～2012.12)の作品を巡る旅について、スライドを交えながらたっぷりとお話を伺いたいと思います。講演会のあとは懇親会も行いますので、是非ともご参加ください。

■日時：令和元年10月10日(木) 18時30～20時(講演会)、20時～(懇親会)

■場所：テラス計画(札幌市中央区北2条西4丁目 札幌三井JPビルディング赤れんがテラス5階)
※3階でエレベーターを乗り継ぎ、3階からは直通です。

■参加費：一般参加・500円(れきけん会員は無料)、懇親会費は別途かかります。

★申込締切★
9月20日まで
れきけん事務局
へメールでお申
し込みください

●炭鉄港が日本遺産に！！

「本邦国策を北海道に観よ! ~北の産業革命「炭鉄港」~」をストーリーのタイトルに、赤平市を代表自治体とした炭鉄港推進協議会(赤平市、小樽市、室蘭市、夕張市、岩見沢市、美唄市、芦別市、三笠市、栗山町、月形町、沼田町、安平町)は、平成31年1月8日に日本遺産申請書を提出していましたが、令和元年5月20日に、日本遺産として認定されました。

空知の石炭、室蘭の鉄鋼、小樽の港湾、そしてそれらをつなぐ鉄道が育んだ北海道近代化の歴史が評価され、これからますます北海道の歴史が世界に発信できるといいですね。(かみ)



～日本遺産～

地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産(Japan Heritage)」に認定するとともに、ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形の文化財群を地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内外に戦略的に発信することにより、地域の活性化を図ることを目的にしたものです。

●建築ヘリテージサロン～多様な知恵と経験を備えて

歴史的建造物を維持するための調査や修復等には専門的な知識と技能を持つ技術者の協力が欠かせません。当れきけんにおいても、さまざまに寄せられる相談や調査業務において、彼らの存在が大きな助けになっています。建築施工、左官、石、瓦、塗装、板金…などの技術者が集まり、建築技能継承集団と称して活動しているのが建築ヘリテージサロンです（以下「サロン」と表記/2009年発足、代表：角幸博）。今回は、サロンが技能面において具体的にどのような取り組みをしているのか、少し紹介してみようと思います。

主には、当れきけんやサロン会員が関与する案件で、より専門的な知見や技術力の必要性が生じた際に、その対象分野を専門とする会員に協力が求められます。過去には、樺太時代の史跡保存事業に係る調査（2010年）にて瓦・塗装・石・窓・設計の会員がはるばる海を渡ったり、沼田家旧りんご倉庫実測図作成（2014年）では煉瓦の会員と当れきけんの協働、寿都町の橋本邸調査（2015年）では瓦・煉瓦・石の会員が、別海町の旧奥行臼駅通所主屋修復工事（2018年）では建築施工・煉瓦・板金の会員が携わりました（他にも多数あり）。

また、ここ数年にわたる取り組みとして、文化財における榎葺屋根の道産松材による榎材復原技術の開発があります。これは、榎葺職人が姿を消していく中で榎葺き屋根の保存や維持への危機感を抱いた設計・建築施工・建材などの会員による試みから始まり、会員の働きかけによって「北海道開拓の村」内に野外展示されている歴史的建造物での実証に向けた動きや、文化建造物の維持・修理に同様の課題をかかえる道内の管理者への実用提案が可能な段階へと進んできました。

そして、最新の実績では、角代表理事が館長を務める「博物館網走監獄」内の煉瓦正門他補修工事（煉瓦）、煉瓦裏門門柱笠石の取換え（石）、二見神社屋根根材の葺き替え（建築施工・建材）といった3施設の補修・修理も担いました。

このように、建築ヘリテージサロンは発足から10年が経ち、多様な知恵と経験を備えた建築技能継承集団としてさまざまに活動し、方々より評価や成果を得てきています。（登尾末佳）

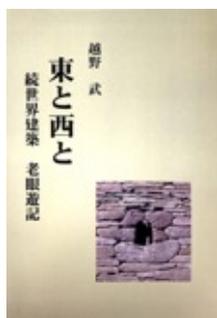


榎材の試作品の検証の様子
（会報『建築ヘリテージサロン便り：第23弾』より）

●おすすめ・れきし系BOOK



- 時と人と 再訪日本 老眼遊記
- 著者・発行者 越野武
- 印刷・製本 漸株式会社



- 東と西と 続世界建築 老眼遊記
- 著者・発行者 越野武
- 印刷・製本 漸株式会社



- 先住民アイヌは どんな歴史を歩んできたか
- 著者：坂田美奈子
- 発行者：野村久一郎
- 発行所：株式会社清水書院

★編集後記★

炭鉄港の日本遺産認定、関係者の皆さま、これまでのご苦勞が報われて本当によかったですね。おめでとうございます。

北海道にはまだまだ残すべき、活用すべき、次世代に伝えて行くべき、歴史的・地域資産がたくさんあります。地域でその価値を再認識し、まちづくりに活かしていけるといいですね。

越野先生の老眼遊記はどこから開いて見ても面白かった（かみ）